

748
708

教科書文庫
6
810
45-1949
0130449692

教育文化研究会編

國語

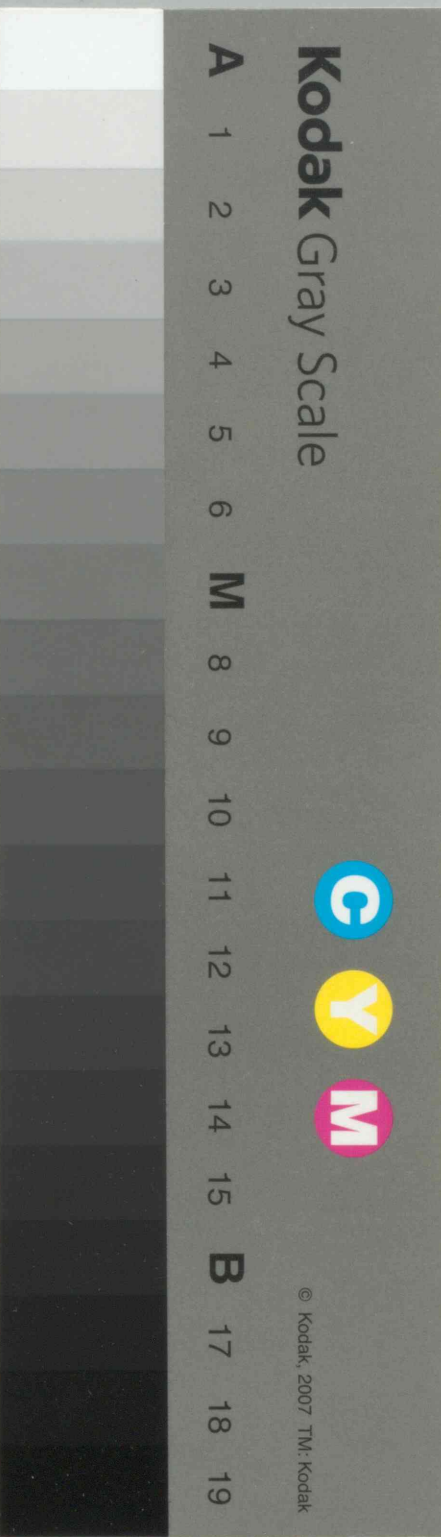
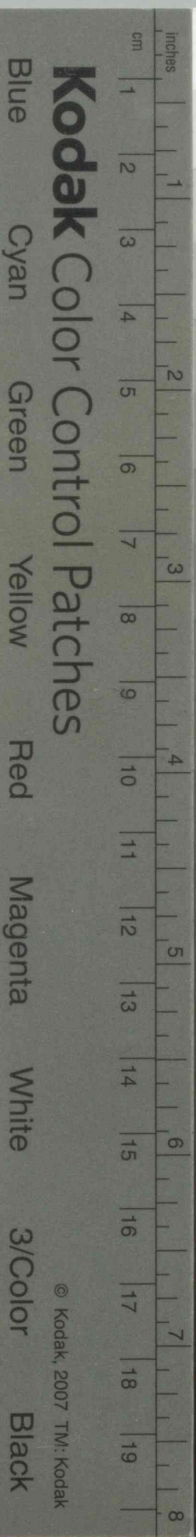
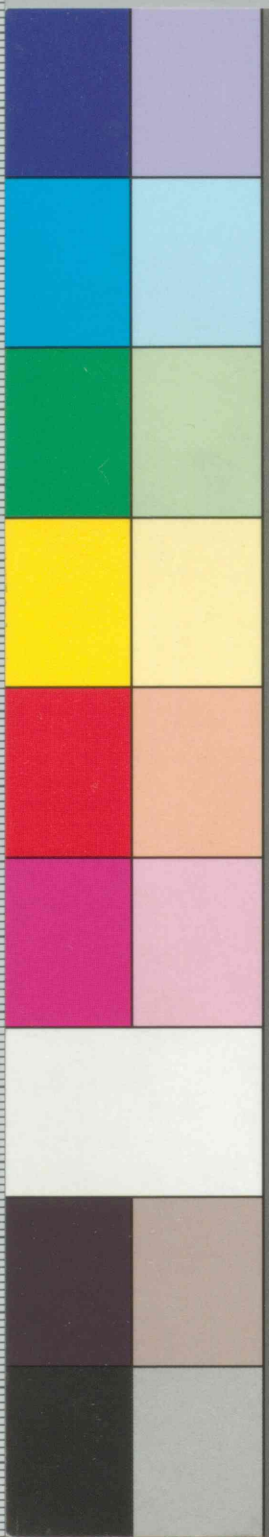
中 第一学年用
学 校

二

教育図書株式会社

文部省検定済教科書

684 類
2 號



60358
教科書文庫
6
810
45-1949
01308
49692



昭和二十四年八月十五日
文部省檢定済
中学校國語科用

教科書文庫

6

810

45-1949

0130449692

中央図書館

國語

第一学年用
中学校

二

教育図書株式会社

広島大学図書

0130449692



広島大学図書

0130449692



目次

一 かしの木……………尾崎喜八…一
 二 うたう水夫……………アン・モロー・リンドバーク…三
 三 くだもの……………正岡子規…三
 四 兄 弟……………山本有三…三
 五 牛を追う……………五十嵐力…元
 六 ぶ す……………(狂言)…三
 七 などの文字……………粟田賢三…六
 八 シナリオについて……………石森延男…五

一 かしの木

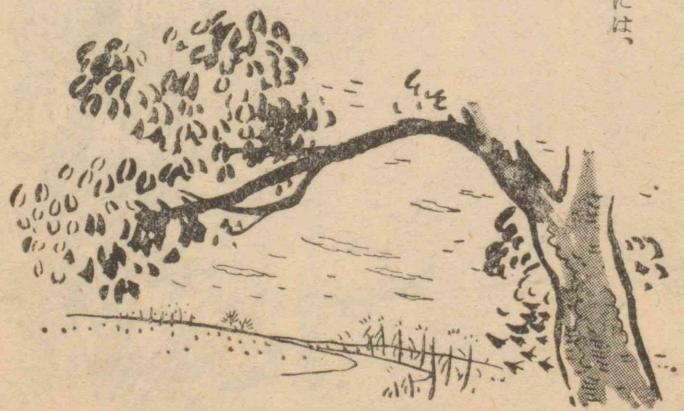
尾崎喜八

この課は、秋の詩である。心靜かに味わってみよう。

尾崎喜八は、明治二十五年（一八九二）東京で生まれた。詩人。著書には、「高原詩抄」「詩人の風土」「山の絵本」「雲」「高層雲の下」などがある。

もうどこかひやりとした薄赤い初秋の日光を、
 小鳥の声のうれしい朝のうちから晝前かけ、
 さわやかに浴びてひろがる九月のかしの美しさよ。
 わけても前方にさし出た一枝は心にかなう。
 はつかに動いてしかも強く、
 ゆたかであってしかも清い。
 にぎやかなとりいれの野を吹いてくるそよかぜは、
 かず／＼の樹木の明かるいはだを愛撫して、
 やがておまえの細い、軽い枝先や、
 靜かな、またつや／＼した葉をすこしゆさぶる。
 そして、日光と空氣の中でするおまえのそよぎは、

一 かしの木



まるでつゝましい喜びのみぶりのようだ。
あの冬の日の北風やひさめにむかう、
りんとして果敢なおまえの精神は、
秋の初めのきょうの日では、
まだ、

あまい樹液のかよう組織のたばの中にやどつて、
ゆつくりと、まいにちの、
金のようなひよりにつちかわれている。
わたくしはまざ／＼とそれを感じる。

しかも甘美な葉むらのその一枚一枚の明潔さと、
臆おそのような枝のその一本一本の強さとを、

どんなにあつい賛嘆の心からいまわたくしはながめるか、
おまえ、秋のむくげのやぶちかく、

たてのようにかゞやく枝を持つつ九月のかしよ。

(詩集「高層雲の下」による)

【学習の手引】

(1)この詩の情景を心に描き、お互に話しあってみる。

(2)この詩を読み、次の問に答える。

イ、「心にかなう。」というのはどういう意味か。

ロ、「つゝましい喜び」というのはどういう意味か。

(3)この詩の意味がよく現われるように、朗読の仕方をくふうする。

(4)秋に取材した詩を作って発表しあう。

二 うたう水夫

アンリモローリンドバーク

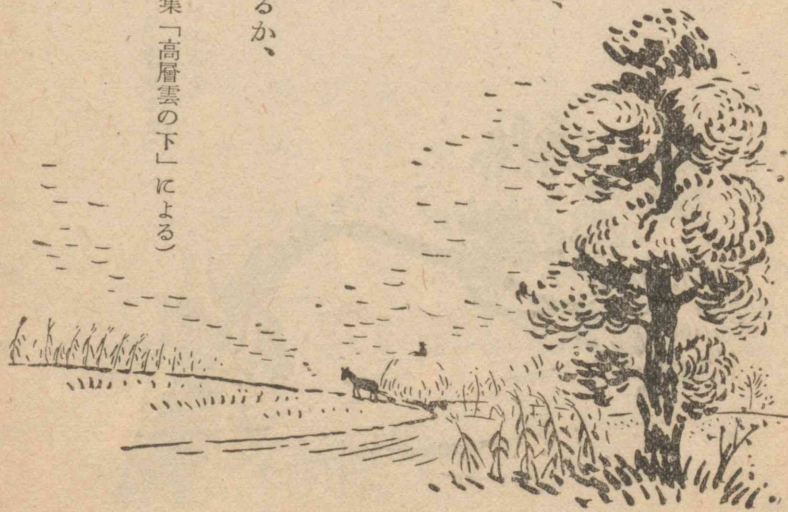
アンリモローリンドバークは、一九〇七年アメリカ合衆国マサチューセッツ州で生まれた。飛行家リンドバーク大佐の夫人。著書には、「風よ、開け」・「未来の波」などがある。

一

「歓迎す…日本…に…リンドバーク…大佐を…歓迎す…」

私はJOCからの第一信を筆記しました。今まで私たちがシベリア海岸に沿って南下する飛行を忠実にあとづけ、そして、これから東京まで導いてくれるはずの日本の根室無線局からです。その時私たちは、カムチャッカと北海道をつなぐ千島列島チシマの上空を飛んでいたのです。

これがプロトン湾に違いない。この緑の火山の中に、さかずきのように小さくなっている小さい港が——と私は地図を調べました。見たところ、まるで「日本式庭園」の小模型で——湾のそばには草ぶきの屋根をもったおもちゃのような家があり、水の上には小さい平底やまぼこの小舟が用心深く浮かんでいます。「典型的な日本風景だ。」と私は思いました。そうして、それらの火山性の峰も——海から直ちに鋭くそびえて、中腹にきれ／＼の霧のまつわっている姿は、これまた典型的です。日本の風景画と



カムチャツカ島の北方にある半島
プロトン湾
千島列島
シベリアの北東部にあ

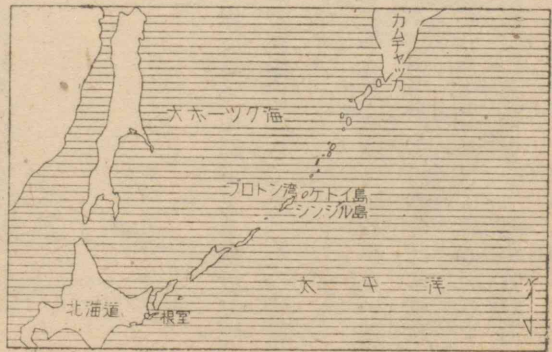
いう風景画が、どれもこれも雲をまとった火山性の峰を背景にして
ることを、私は思い出しました。

通信は私の耳に響いてきます。

「リンドバーク：大佐を：日本に：歓迎す。」

日本からの第一信が、少しも実利的なものでなく、純粹に優雅な
いさつであることも、またなんと典型的でしょう。飛行機の位置とか、
天候とか、事務的な話をする前に、まず歓迎のおじぎをしたわけです。
根室の方でも、位置や天候とかについては、私たちと同じくらい気に
しているのですが、まずおじぎが第一なのです。お、永遠の紳士
よ。

しかし天候の通報は重要です。そのしばらく前から、東の方に当た
って長い土手のように霧が低くたなびているのが気になっていまし
た。海上はるかに、第二の水平線のごとく、この平らな白い線が、私たち
のコースに平行して、前方へと延びています。初めのうちは、私たちに、「誤っても越えては
ならぬ境界線を示してやるから近づくな。」と警告するかのよう
に、慎重に一定の距離を保って、むしろ近づくのを避けていたよう
でした。が、次第次第に私たちを圧迫してきて、千島列島の二十四
キロ東を飛行するはずであった私たちの予定のコースを、西へく
と動かし、今や列島の真上を飛ばせつゝあるのです。前面をのぞ
むと、霧の線と、島々の線とが、一つに集まりつゝあります。浅瀬
の寄せる長い波のよ



ほたるぶくろ
ききょう科
の多年生草
木。

うに、この霧の大群は島々の火山性の峰に当たってくれています。これは岩の出た海岸に、特別
大きな波がふいに寄せて来てみぎわを越え、私たちの立っている岩までぬらす時と同じように、その時
限りのできごとであろうか。それともほんとうに潮が満ちて来て、足の下の岩がみんな波の下に隠れ
てしまうのであろうか。優美な島々のいたゞきが、子どもの食後のお菓子のように霧の中から頭を出
し、そして霧の海の中に浮かんでいるのを私は見おろしました。時々、雲のきれめから、岩ばかりの
海岸や、「ほたるぶくろ」の花に似た、あい色の海が輝いては消えるのがのぞかれます。それはなご
やかにぼかされた、光のゆらめく、恐ろしいというよりも、むしろ美しさにうたれる、この世ならぬ
夢の世界です。

「天候：速度：位置を：通報：ありたし。」

根室局から第二信です。実際のなところを見せてやらなければならなかつたのですけれども、どこ
を飛んでいるのか私にはわかりません。

「霧を：冒して：飛行しつゝあり。」私は返信しました。「位置は：直ちに：通報すべし。」

雲のようすには、今に晴れるだろうと軽く見ていられないものが現われてきました。一瞬間ごとに
ひろがって、今や前面は一面の雲の海です。しかし、まだいくらか低いので、その上を飛ぶことはで
きませんが、それも飛んで行く先が好天気ならです。しかし今、その雲の向こうの空は灰色です。こ
れはどういうことなのでしょう。もっと霧が深くなるのでしょうか。

「根室：は：晴天：なりや：上昇限度：および：視界を：通報ありたし。」

私たちは、目の下にあるこの險悪な天候の深淵を越すのに、引っ張ってもらう手がほしくなって、

あちらは絶好のひよりだということばが聞きたかったのです。

あわのような霧が、山の中腹を隠しているのを私は今まで飽きるほど見ましたが、こういう霧は、微笑して、静かに輝いています。その下に隠されているのを、決してそぶりにももらしません。

私は、気がつかないほどかすかに恐怖の襲って来るのを感じました。この時、夫は紙片をよこしました。

「海上の霧は数千メートルの高さまでひろがってきた——暴風の雲が前面にある——引き返して第一の機会に着水しよう——今いるのはシンシル島西南端の上空。」

私は根室局にあてて送信しはじめました。

「海面……に……霧あり。」「前面に……暴風の……雲あり。」「われらは……方向を轉じて引き返しつつあり。」「第一の……機会に」着水……すべし。」

「着水のため……方向を轉じて……引き返しつつありや。」と、根室局からの返信がすぐ来ました。

「プロトン湾……着水が……もつとも……得策ならん……。」

夫は操縦席のカバーをはねのけて、飛行ヘルメットをかぶり、飛行用のめがねをかけ、遠くまでよく見るために、座席を高くして前方にのり出しました。「さあ、また戦闘だ。」私は、夫のこの見慣れている激戦にのぞむ武装を見て、戦闘開始だと覚悟しました。

夫はアンテナを引っ込めろと手まねで命じました。不時着水の意味です。私はベルトをしっかりしました。私たちは雲の上に出ている峰のいたゞきを旋回して、大胆不敵にもすぐ近くまで近づいてから、急降下を試みました。発動機を止めて、下へ、下へと、空中滑走していると、濃霧に包まれて

一時何も見えなくなります。空さを見えませんが、何かたよりになるものが、下に見つからぬうちに上の空も見えなくなるのは、なんと心細いことでしょう。

山のはるか下に、「ほたるぶくろ」の花の青さに似た水の光るのが見えました。それをめざして急降下です。下へ、下へ、——空はもう見えません。海よ。そのあい色の一片——海だけがたよりののに、あゝ、その海も消えました。もう何も見えません。その中をまだ降下して行きます。おゝ、神様——山に衝突してしまいます。激しい苦痛のような恐怖の波が、私の全身を襲いました。「勇氣——」「誇り——」「克己」というような、無意味なことばは、まっ黒く焦げて、灰になりました。

突然、機体が傾斜したかと思うと、また発動機の爆音が響いて、氣持の悪くなるようなゆるい輪を描いて上昇です。上へ、上へ、上へ。私はおぼれる人が、水面に浮かび上がろうとしてあせる時のように、あえいでいる自分を発見しました。そこには——霧の上は、晴れた青空と太陽です。勇氣は、再び私の血管の中に、暖かく激しく流れて、もどって来ました。ありがたいことには青空があります。「あれに両手ですがるがいい。あれに引き上げてもらいましょう。いつまでもここにいまししょう。空の見える、太陽の感じられる、この輝いた明かるい現実の世界に、いつまでもいまししょう。」と私は思いました。そして、決してもう霧の下の世界にはおりません。

ところが、夫はまた着水しようとしません。パイのかんの内側のふちにナイフを入れるように、霧と山との間をぬって着水する決心なのです。「なんでもないので。」とあとになって言うのでしょうか。それよりも、あとになってそんな話ができるほど、死なずにいられるのでしょうか。

彼は緊張した顔をして、操縦席の横からのぞくとくちびるを強くかんでいます。吹きつける強い風

の力は、彼の顔をやせさせ、最後の悪戦だと歯をくいしばっているようなすご味を添えています。では、私たちは最後の悪戦を試みているのでしょうか。私は夫がこんな顔をしたのをまだ見たことがありません。——彼の顔は風のためにへんべいになったように見え、額だけが高くきわ立ってきて、まるでがい骨です。

そして降下すると、また——恐怖です。上昇して青空に出ると——また勇気がわき、今の恐怖が恥ずかしくなります。

前面には何も見えません——しかし頭の上には、青空と、そして輝く太陽があります。ふいに私の心の中に、「太陽はたゞで照っている。」と、この場合に不似合な、軽いことばが流れて、私は急に愉快になったものです。要するに、私たちは死ななかつた。そしてこの青空の中を自由に飛んでいる——そうして、「太陽はたゞで照っている。」ではないか。そう考えると、私はむしろに朗らかになったのでした。

旋回して降下するにつれ、太陽の光はあせて、しまいには霧の中で水っぼい円盤のように見えてきました。「二度と再び飛行はしまい。」という声、私の耳に意地悪く響きます。「そうだ——二度と再び飛行はしまい。」とひとりごとを言ってから、おそらく飛行はこんどが最後で、それが事実になるであろうと思うと、恐ろしさで全身がふるえました。

下へ、下へ。暗黒の中に旋回降下してゆきます。今までは、こんなに下までおりはしませんでした。火山のふもとにある長い、緑の傾斜地が見えてきましたが、あすこに着陸できるのでしようか。灌木と岩石ですが——フロート（飛行機の下の方についている船）があるから、激しい振動にも耐えら

れるでしょう。あんな所でも——着陸さえできたらありがたいのですが——でも違いました。私たちは、たちまちのうちにその灌木地帯をすれ／＼に通り過ぎてしまい、一直線に傾斜地に沿って下がったのです。すると、その傾斜地のつぎる所に十五メートルばかりの断崖ががあって、薄い霧の下に海がありました。動揺し、変化し、私たちの目からのがれようとしている海がありました。

その海こそ私たちが求めていたものです。霧に隠れぬうちに——池の中に小石を投げ、おどり込んでそれを取る時のように、見えなくなる前にそこに届きたいというのが、その時のたゞ一つの願ひでした。そこまで行けるだろうか。それとも苦しい思いをして再び上昇しなければならぬのであろうか。やっと断崖を過ぎて海上に出ました。フロートを打つ水の音がすさまじくします。フロートがこわれたのでしょうか。もしや機体が沈むのではないかと驚いたのですが、それは着水の初めに座席が激動しただけのことでした。波は荒いようです。海面をすべる速度もすぐおそくなりました。もうだいたいしようぶです。着水したのです。

夫は初めてこちらを向いて私の顔を見ました。

「どうした。」

「なんでもありません。」と私は口ごもりました。「とてもうれしいのです。着水できて。彼は笑い出しました。」

「たいして危険じゃなかつたんだよ。いつでも引き返せるんだがね。ぼくはプロトン湾にはいらたかつたんで苦心したのさ。どうも外海に投錨したくないからね。——どこか、もっと吹きさらしでない場所をさがすことにしよう。」

私は座席のカバーをすっかりあけて、外をながめました。ゆるく回轉している発動機は、夜じゅう家のまわりを吹く風のような、一種特別な、ものさびしい、うら悲しい、泣くような響をたてています。また、海岸の岩にくだける波の音も聞えてきますが、目に見えるのは一面の霧ばかり。よくもまあ着水できたものと、いままさら驚きました。

いったい、何時なのでしょうか。無線の連絡をやめてから、もう一時間以上になります。故郷のことがしきりに胸の中を往來します。墜落惨死したというようなうわさがたっていないだろうか。「第一の機会に着陸すべし。」という最後の通信は、どう解釈されているだろうか。この不時着水を日本人はなんというだろうか。「バン、バン」と大きな音がするのは、尾翼が海草の上を乗り越えているのです。機体の進行は実際にはかどりません。そして、どこにも生きているもののようなすは見えません。ただ、いそぐだけける波の音と、発動機のうなり声だけです。

やっこのことで、私たちは島の風かけまで來られたので、発動機を止めていかりをおろしました。さあ、これから根室無線局と通信の交換です。私たちはアンテナを機翼に張って、JOC…JOCと呼ぶと、ありがたいことに、聞いていてくれて、たちまち返事がありました。

「QRK(よく、聞える、信号良好)…GA(送信あれ)」
私は打ちはじめました。

「濃霧…のため…不時…着水…濃霧…のため…プロトン…湾…に…着水…不可能…ケトイ…島…南…東…海岸…より…二〇〇…メートルの…外…海…に…投錨せり…海上…視界…三〇〇…メートル…こんや…險悪なる…天候…予想せらるるや。」

発信を終ると、根室局から他の局に私たちの無事着水を知らせる音波が、私の耳に傳わってきました。

「オーケー」返事がありました。「当地にては…險悪なる…天候…予想…せられず。」

根室局からの通信は、まだ続きます。

「当地は…天候静穏…着水…時間…通報ありたし。」

「(天候静穏。)私はすっかり安心しました。」

「グリニッチ標準時〇七・四五…着水…明朝…快晴ならば…根室に…しからざれば…プロトン…湾に…向かふ予定…明朝…貴局と…通信すべし…サンクユー。」

「当地にては…一…二…時間…以内に…プロトン…湾まで…シンシルマルを…來たらしむべく…手配せり。」

筆記しながら私は、どうしてこんなによやく手配できたものか驚嘆しました。そして筆記を夫に渡しながら、実にしんせつだと思いました。私はシンシル丸とはどんなものか知らないのですけれども、とにかく、私たちを援助に來てくれるんですから、聞いただけでも氣が強くなります。

しかし夫は、こう返事を口授しました。

「貴局に…深く…感謝す…御厚意を…謝す(彼はタイプライターで手紙を書く、いつでもこの調子ですから、ちょっと見れば私にはわかります)…たゞし…突発事故…起るに…あらざれば…援助を…要…せず(男の人はこれだから…私はシンシル丸がどんなものか、もう見ら

れないだろうと残念でした。……事故……なければ……十時間……以内に……貴局と……通信すべし。」

「オーケー。」

と返事が来ましたので、万事これでかたづけました。私たちは無事に着水して、安全に投錨し、JOCとも通信したのですから、あとはゆっくり寝るだけです。風は悲しい音を立てて、霧は機翼をかすめて流れ、そして海の波はひた／＼と静かにフロートをなめています。しかし飛行機の胴の中は乾燥していて暖かいのですから、静かに波にゆられていると、すぐ熟睡できるでしょう。

するとなんででしょう。まだ何かあるんでしょうか。根室局はまだ通信しているのでしょうか。私は筆記しました。

「われらは……貴下の……明朝……到着を……熱心に……歓迎す……おやすみあれ……リンドバーク……大佐によりしく……傳へられたし。」

お、永遠の紳士よ。

二

翌朝、予定通り無線の通信をちょうど終った時——そこに彼らが現われたのです。島のかげから、丸い水兵帽をかぶった頭をひよいひよい動かして、かいをこぎながら陽氣な歌をうたって水夫たちが現われました。

彼らは私たちの方をめざして、こいで来るのですが、突然どこからともなく現われたので、さながらギルバート・エンドー・サリバン の歌劇で、「右手より八人の、うちたら水夫ら登場」というので合唱團

が出て来るのに、よく似ています。しかし、どこから来たのでしょうか。機翼を越して見わたしますと、二百メートルばかりのあなたに、一本のマストの船がゆったりと浮かび、既にいかりをおろして落ち着きはらっています。かんばんには洗たく物がほしてあり、そして炊事場からは煙が立ちのぼっています。この船は霧の中から現われたのか。それとも昨夜からそこにいたのではあるまいかと思われるほど、静かに来たのでした。風のために船尾がこちらに向くと、日本字の船名の下に、ローマ字でシンシルマルと読めます。昨夜、根室無線局から「貴下に助力するためプロトン湾までシンシルマルを派遣すべし。」と知らせしてきたシンシル丸です。そして私たちが辞退したシンシル丸だったので。いずれにしても日本人は、賢明にも、同船を派遣したので。私は同船到着の旨を根室局に通信しました。

この時、例の八人のうちたら水夫たちは、フロートのそばまでこぎ寄せて来て、ひとりの小がらな高級船員が（あとでわかったのですが、無線技手でした。）立ち上がって、私たちにおじぎしてから、フロートに足をかけて、つかまるものをさがしているようでしたが、アンテナのはりがねをつかみかけました。私たちは叫びましたけれども、とっさの間のことだったので、その小がらの無線技手は四百ボルトの電流に触れてしまいました。驚きもしないし、痛かったようも見せずに、たゞ手を放して、弁解的な微笑を浮かべただけです。そして遠慮がちに、『これは……エー、エー、なんですか。』と英語で聞きます。

私たちはいちおう説明してから、彼が飛行機に上って来るのに、もう一度触れさせては氣のどくですから、電流を止めました。彼は操縦席をおもしろそうに見まわしたあとで、せきばらいをしてか

ら、改まってエー、エーと始めました。

「あなたは……エー……エー……エー……エー……エー……持っているですか。」

夫は彼がなんのことを言っているのかよくわからないので、下の方から塩水にぬれて柔らかになっているクッキー（お菓子）を取り出して彼に渡したものです。私たちの親愛なるこの友人は、おじぎをして、微笑して、そして礼儀正しくクッキーを飲み込んでしまいました。

そして再びくり返しました。

「あなたは、エー……エー……エー……エー……エー……持っているですか。」

「何を持ってるかですって。」

「コーヒーが——船に——あります。」

と微笑して、シンシル丸を指さしました。

「あ、コーヒーですか。そうですか。そうですか。……コーヒー。」

そこで、私たちは、みんな微笑しました。

やがて、私たちはシンシル丸の暖かい小さい船室で、せっけん、かなだらみに入れた湯、くし、ロールクリームというような予期しない、うれしいぜいたくな接待を受けました。そしてふうさいのりっぱな船長は、自分の引き出しから、頭につけるポマードまで出してくれました。

それから、待ちこがれたトーストと「コーヒー」です。この朝飯をすますと、私たちは熱意をもって感謝し、みんなと握手してから飛行機にもどりました。霧が晴れ上がりそうですから、すぐにも飛行したいのです。私たちを送って来た例のうたう水夫たちは、フロートの支柱が曲がった部分に丸材

を打ちつける作業を手傳ってくれてから、こぎもどりました。

出発の準備はできました。スターターのうなりが次第に高くなり、クラッチのきしむ音がして、エンジンがちょっと動いたかと思うと、バツタ、バタ、バタと止まっています。幾度やってみてもそれ以上に反応がありません。寒くしめっぽいお天気です。島の斜面を強い風が吹きおろして来て、あらゆるものを霧と海水のしぶきとでおおいます。シンシル丸の水夫たちは、かんばんの手すりによりかゝって見物しています。

ふと気がつくとき、私たちとシンシル丸との距離が遠ざかりつゝあります。機体が潮流に流されているのだろうか。いかり綱はだらりとびています。

夫は直ちに操縦席からフロートの上に飛び降りて、いかり綱を引っ張ると、すら／＼実たたわいなく上がって来て、すり切れた端が水の上にはね上がりました。いかりはありません。一晩じゅう鋭い岩のかどでこすりつけられていかり綱は切れてしまったのです。機体は潮に流されて、岩にくだける波うちぎわから、もう三十メートルと離れています。そしてこの危急の場合にエンジンには動かないのです。

私たちは両手を振り、声を張りあげて援助を求めました。水夫たちは既にボートをおろして急漕（せう）していましたが、その息もつけない急な調子に合わせて、あい変わらず歌をうたっています。そして敏捷（しやう）に、かつ手ぎわよく、岩に向かつてうち寄せられている私たちの飛行機をつかまえて、彼らのいかりに結びつけてから、また微笑しつゝこぎもどりました。「貴下に助力するためシンシル丸を派遣すべし。」昨夜の通信は、こゝで実現したわけです。

事実、私たちはこれ以上にもシンシル丸のせわにならなければなりません。エンジンをスタートするために使いすぎたので、蓄電池の電気がなくなりかけたのです。ですから危険の場合にせまうて無線を発するような時でなければ使ってしまうたくありません。エンジンが動き出せば充電できるのですけれども、そのエンジンがまたちっとも動いてくれないのです。

この時、アメリカに私たちの無線機・エンジン・いかりが破壊したといううわさが伝わったのも決して不思議ではありません。そうなったのも同様だったのです。エンジンの修理をするには、波が荒れすぎるし、またぬれすぎていました。そこで私たちは、シンシル丸の無線をかりて通信し、いかりまでシンシル丸のを借用しました。

そして午後になると私たちは、彼らの料理のにおいを、盛んにかいでいました。さかなをフライするうまそうなにおいが幾時間も続けてシンシル丸の炊事室から流れて来ます。私たちはサンドウィッチ・クッキー・チョコレートなどを積み込んで来たのですけれども、この二十四時間というものは食事らしい食事をしないで大いに空腹を感じだしていたのでした。あんなにみんなしんせつなのですから、きつとシンシル丸の食事に招待してくれるのでしょうか。今にも例のうたう水夫たちが迎えに来るのでしょうか。

私たちは待ちこがれました。夫は待っている時間の長さをまぎらすために、エンジンの使用方法に関する本を引っ張り出して読んでいます。私は、一心になつて船の方を見ているのですが、シンシル丸には動いている人影もありません。たゞ、例のうまそうなにおいばかりが流れて来ます。

三時になつたので、私たちはベークド・ビーンズのかんをあけ、ビスケットで食事をすませること

にしました。たぶんシンシル丸では食料が欠乏しているのであろう。——それで招待しないのだらう。いずれにしても、あの人たちはじゅうぶん以上に盡してくれたのだ。——食事ぐらいは自分たちでしなければ——そう考えて、食事することにしたのですが、冷たいベークド・ビーンズをビスケットにぬって食べるのははなはだうまいものです。

ちやうど私たちがかんをからにした時でした。かいの音と、例の歌声が聞えてきました。悪いことでもしたように、私たちはくちびるについているものをなめ落して顔を出しました。

「あなたがたは、エー、エー、私たちといっしょに……エー、エー……本船で、エー、食事しますか。」と例の小がらな無線技手がおじぎをしました。

私たちはベークド・ビーンズのことはおくびにも出さず、微笑とビスケットのくずをかくしてその招待に應じました。

おさかなのフライといためご飯については、私の想像が適中していましたが、私たちのために特別に乾燥鶏卵粉末で料理した、いり卵とかんづめのハムがあったし、はしの代わりにフォークまで出されたのは、全く予期しなかったごちそうでした。

飛行機内の第二夜は、樂々と寝られませんでした。日本人は、シンシル丸に来て寝るようになると言ってくれたのですけれども、場所の狭いのを知りながら、やっかいになるのは氣の毒ですし、また天候が悪変する場合に、飛行機を守らねばなりませんので、せつかくのしんせつを断ったわけです。いったい、飛行機の中で寝るということは必ずしも窮屈だと決まったものではありません。ところが今夜は違います。

旋風が西へと海面を吹き荒れ、山のいたゞきを越えて吹きおろして来るので、私たちの碇泊している風かけの海さえ、白波をけたてています。ですから機体はひどい動搖で、私たちも胴の中で、左右にころげるしまつです。通風筒に風の鳴るのが、無線の奇怪な音波のように響き、私には筆記のできない速度で、かすかな物音が私を落ち着かせまいとして、頭の中を走り過ぎます。

こんな物音の悪夢の中に、突然、泣くともうたうともつかぬ人間の声がかかります。夫は操縦席まではって行って、昇降口をあけ、そして暗い夜のやみをすかして見ました。横なぐりの雨が顔に当たります。小さな光が波の上を浮いたり沈んだりしてこちらに来るのが見えます。例のうたう水夫たちです。

こんな荒れている晩に、なんの用事があって彼らはいいで来るのであろうか。また飛行機が、潮のために引きずられて流れているのだろうか。あるいは暴風の警報なのであるまいか。旋風が方向を轉じて、まともに飛行機を吹きつけるとの警報だろうか。

夫は緊張して、近づき来る光を注視しました。黒い海の上に、更に黒くボートが現われました。水夫たちは荒れ狂う波の中を力の限りこいで、そうしてフロートまでこぎ寄せると、ひとりの水夫は手をのばして夫に封筒を渡しました。封を切った夫が、懐中電燈の光で読むと、こうあります。

「日本國民は熱心に貴下を歓迎し、かつ貴下の安着を待つ。」

読んだ夫はどなりました。

「これだけですか。」

この風に吹かれている水夫たちには、夫の声が聞えぬようです。しかし返事を待っているようすな

ので、夫は受け取った意味を走り書きにして渡してから、また、寢床にもどって來ました。けれども、彼にはどうしてもがてんがゆかぬようでした。

「こんなしけの中を、電報だけの用事で來たとは思えない。」

翌朝になってわかったのですが、彼らは私たちの飛行機の安全を心配して、わざ／＼二インチのいかり綱で、本船と飛行機とをつなぎに來てくれたのでした。電報は附録だったので。

これが私たちの外海ですごした最後の夜でした。

その翌朝、私たちは待ちに待ったプロトン湾に曳航されたのでした。私はシンシル丸のデッキから、夫を乗せた飛行機がかもめのように軽快に波をきるのをながめていました。そして私たちの目的地——ずっと前に眼下にじらすように輝くのを見た、あの円すい形の火山からえぐりとったような港に到着したのはその日の夕暮れでした。

波うつ海も湾内にはいると鏡のように静まっていました。火山性の絶壁は私たちを囲んで引き入れてくれました。岩だらけの海岸、草ぶきの家、小舟などは、私たちが箱庭として上空から見おろした時と同じようにあります。ある奇跡によって私たちもまた、今その箱庭の一部になったのです。

〔世界名作選(二) 深沢正策の訳による〕

【学習の手引】

(1) この長文のすじを短いことばで言ってみる。

(2) いろんなことが無電で言いかわされたか、書き出してみる。

(3) 「うたう水夫」というのは、どういう意味かを考えて、話しあう。

- (4)「うたう水夫」たちのしたことを簡條書にしてみる。
(5)無線電信・ラジオが、世の中をどう変えたかを調べてみる。

三くだもの

正岡子規

正岡子規、本名は常規。慶應三年(一八六七)愛媛縣松山市で生まれ、明治三十五年(一九〇二)なくなった。
俳句・短歌の革新を唱え、新体詩・小説・俳文にも力を注いだ。「墨汁一滴」・「仰臥漫録」・「病床六尺」などの著書がある。

一

予がくだものをこのむのは病氣のためであるか、他に原因があるかいっこうにわからん。子どものころはいうまでもなく書生時代になってもくだものは好きであったから、二箇月の学資が手にはいって牛肉を食いに行つたあとでは、いつでもくだものを買つて食う例であつた。大きなしならば六つか七つ、たるがきならば七つか八つ、みかんなら十五か二十ぐらい食うのが常習であつた。いなかへあんざやに出かけた時なども、普通のはたごの外に、酒一本も飲まぬが金はいらぬはずであるが、時々路傍の茶店に休んでなしやかきを食うのが癖であるから、ぞんがいに金を使うようなことになるのであつた。病氣になつてまったく床を離れぬようになってから、外に楽しみがないので、食事のことがいちばんぜいたくになり、ついにはくだもの毎日食うようになった。毎日食うようになっては何がうまいというよりは、たゞ珍しいものがうまいということになつて、とりとめたことはない。

そのうちでも酸味の多いものもつとも飽きにくくてよけいに食うが、これは熱のあるせいであらう。なつみかんなどはあまり酸味が多いので普通の人は食わぬけれど、熱のある時は非常にうまく感じる。これに反してりんごのような酸味の少ない、しるの少ないものは、初め食う時は非常にうまくても、二、三日も続けて食うとすぐに飽きがくる。かきは非常に甘いものと、しるはないけれどりんごのようにかわいておらぬので、飽かずに食える。しかしだん／＼氣候が寒くなつて後に食うと、すぐに腹をいためるので、先年も胃がいれんをやつてこり／＼したことがある。なしも同じことで、冬のなしはうまいけれど、ひやりと腹にしみ込むのがいやだ。しかしながら自分にはほとんどきらいだというくだものはない。バナ、もうまい。バインアップルもうまい。くわの実もうまい。まきの実もうまい。食うたことのないのはすぎの実とおもとの実くらいである。

二

明治二十八年、神戸の病院を出て、須磨や故郷とぶらついた末に、東京へ帰ろうとして大阪まで来たのは十月の末であつたと思う。その時は腰の病の起りはじめた時で、少し歩くのに困難を感じたが、奈良へ遊ぼうと思つて、病をおして出かけて行つた。三日ほど奈良に滞留の間は、さいわいに病氣も強くならぬので、予はおもしろく見る事ができた。この時はかきが盛んになつてある時で、奈良にも、奈良近辺の村にもかきの林が見えて、なんともいえないおもひきであつた。かきなどというものは、従来詩人にも、歌よみにもみはなされてあるもので、ことに奈良にかきを配合するというようなことは思いもよらなかつたことである。予はこの新しい配合を見つけて出して非常にうれしかつた。

ある夜、夕飯も過ぎて後、宿屋の下女にまだごしよがきは食えまいかという、もうありますと言

錦手の模様の描いたもの

月が瀬奈良縣添上郡月瀬村。梅林の名勝地。

う。予は國を出てから十年ほどの間、ごしょがきを食ったことがないので非常に恋しかったから、さつそくたくさん持って来いと命じた。やがて下女は直径一尺五寸もありそうな錦手の大どんぶりばかり山のごとくかきを盛って来た。さすがかきずきの予も驚いた。それから下女は予のためにほうちゅうを取ってかきをむいてくれるようすである。この下女は年は十六、七くらいで、色は雪のごとく白い。生まれはどこかときくと、月が瀬のものだと言うので、予はうめの精霊でもあるまいかと思つた。やがてかきはむけた。予はそれを食うていると、彼女は更に他のかきをむいている。かきもうま。場所もいい。予はうっとりとしてみると、ポーンというつり鐘の音が一つ聞えた。彼女は「おや、初夜がなる。」と言つてなおかきをむき続けている。予にはこの初夜というのが非常に珍しくおもしろかった。あれはこの鐘かときくと、東大寺の大つり鐘が初夜をうつのであると言つた。東大寺がこの頭の上にあるかと尋ねると、すぐそこですと言つた。予が不思議そうにしていたので、女はへやの外の板の間に出て、その中障子をあけて見せた。なるほど東大寺は自分の頭の上に当たっているくらいである。何日の月であったか、そこらの荒れたる木立の上をさびしそうに照らしている。下女は更に向こうをさして、大佛のお堂の後のあそこの所へ来て、夜は鹿が鳴きますからよく聞えます、というのであった。

〔子規全集〕による

【学習の手引】

- (1) 一、二には、それ／＼どんなことが書かれているか。短いことばで言ってみる。
- (2) 次の問に答える。
- イ、「須磨や故郷とぶらついた。」の「と」はどういう意味か。

- ロ、「配合」ということばはどういう意味か。
- (3) 自分の好きなくだものについて話しあう。
- (4) くだものに取材して文を作る。
- (5) 作者についてもっと調べる。

四兄弟

山本有三

山本有三、本名は勇造。明治二十年（一八八九）栃木縣で生まれた。小説・戯曲に筆をとっている。政治家でもある。著書には、「路傍の石」・「波」・「山本有三全集」などたくさんある。

— にいさん、これそうだろう。

— どれ。

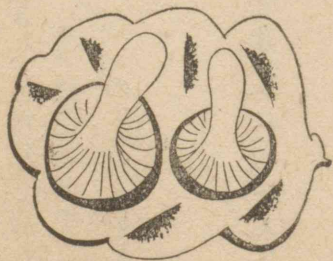
兄はそばにいる弟の方をふり向いた。そして弟の差し出したきのことを見た。しかし、すぐ言った。

— それは違うよ。こういうんでなくっちゃ。

彼は、自分で今取ったばかりのはつたけを弟に示した。

— これだめ。

弟は残り惜しそうに、取ったきのこをながめていた。



— あ、かさの下にぎざ／＼のないのはだめだよ。へびだけってね、毒きのこなんだよ。彼はまだ十一の少年だけれど、弟に対する時は、さすがに兄らしい落ち着きと、いたわりとがあった。

弟が少し、しょげているのを見ると、彼は氣の毒になった。それでポールーバンのような色をしたはつたけの頭を見つけると、すぐ弟に教えてやった。

— 眞ちゃん、そこにあるよ。

弟はそれを聞くと、元氣づいてそこらを見まわした。しかし、白茶けた落ち葉の外には、なんにも目にはいるものはなかった。兄は重ねて言った。

— そら、そこにさ。眞ちゃんの足もとの所に。

— どこに。

— これさ。

と、兄は弟のそばに寄って来て指さした。

— 葉っぱでわからないんだもの。これ。

弟は落ち葉を拂いのけて言った。

— あ。

— 毒だけじゃない。

— うん、これがほんとうのはつたけだよ。

— ぼく、取ってもいい。

— ういとも。

弟はかざんではつたけを抜いた。しかし、ぶきみな虫でもつかんだ時のように、あわててきのこを離してしまった。

— なんだって捨てちまうの、眞ちゃん。

兄の声には詰問の色があった。

— だって、こわいんだもの。

— 何がさ。

弟はうつむいたまゝ黙っていた。

兄のくちびるには微笑が浮かんできた。

— あ、きのこの色が変わったんで驚いたんだね。なあに、そりゃなんでもないんだよ。はつたけ

はさわると、すぐ色が変わるんだよ。

— じゃ、だいじょうぶ。

— だいじょうぶさ。

弟はやっと安心したというふうであった。

— もったいない。こん中へ入れときよ。

兄はざるの代わりに、地上に裏返しにしておいてある自分の帽子をさした。弟は拾ってその中へ入れた。それから、ついでに、兄が取った帽子の中のきのこの数を、数えてみた。

その間に、兄は落ち葉をかさつかせながら、あっち、こっち、はつたけをあさっていた。兄が目を

きよろきよろさせているようすは、ちょうど、朝、おばあさんが背中を丸くして、ふとんの上でのみを追いかけるかっこうとよく似ていた。弟はそれを見ると、わけもなくうれしい氣持になつてきた。そして、自分もまた、すぐに背中と目玉をまあるくして、たけ狩をやりだした。もちろん、弟は兄の四半分も取れなかつたけれど、まつ林の中をはねまわつて歩くことは、なんといつても、彼には愉快でたまらなかつた。

突然、どしんとという響がした。兄はふいと目を上げると、一間ばかり先の、少し傾斜になつてゐる地面の上を、弟はころ／＼と落ちてゐた。おそろく、木の根か何かにつまずいて倒れたのが、はずみをくつて、ころがり出したものらしい。それを見ると、兄は思わずふき出してしまった。弟が目の前で倒れたのだから、すぐにも駆けて行って起してやるのが当然なのだが、その瞬間には、「弟」とか、「起す」とかいう考えはまるでなかつた。それどころか、手を打つて、はやしたてたいような氣持でいっぱいだつた。しかし、次の瞬間には、もう弟のそばにいた。そして木の根かたで止まつた弟のからだを引き起した。

その時の彼は、いたわり深い兄であつた。彼は心配にふるえながら弟を介抱した。ところが弟は起き上がると、兄の顔を見るなり、にやりと笑つた。すると兄の顔も、またひとりではほおえんでしまつた。泣き出すと思つた弟が笑つたものだから、兄は急に氣が軽くなつた。

弟は起き上がると、すぐに笑えたくらいだから、どこもけがはしてゐなかつた。しかし、彼の笑いはみょうちきりんな笑いだつた。もちろん、しくじりをやつたあとの、てれ隠し笑いに相違ないのだが、それにしても、どこか変なところがあつた。よく見ると、それは弟の右のほつぺたに、したゝか

どろが着いていたからだつた。おそろく、倒れた時にくつ着いたものだろう。兄はそれを知ると、すぐに指でどろを落してやつた。けれども、よく落ちないので、筒そでの中に手を引っ込めて、それでほつぺたをこすつてやつた。ところが、それでもすっかりきれいなならないものだから、こんどは筒そでの先につばをくつ着けて、ていねいにふいてやつた。その間、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるまゝになつてゐた。

それから、ふたりはまたたけ狩をやり出した。

しばらくしてから、兄ははつたけでいっぱいになつてゐる帽子を取り上げて、得意そうに言つた。

——真ちゃん、こんなに取つたよ。

その時、突然後で大きな声がつた。

——やい、それを持つてくことはならねえぞ。

ふたりはびっくりして、その声の方を見た。後に山番のじいさんが立つてゐた。彼は待ち構えていたといわぬばかりに、ふり向いた少年の手から、きのこのはいつてゐる帽子を取り上げた。そして、いきなり兄の横つらを一つ、なぐりつけた。

——ふてえやろうだ。

しかし、年上の少年は泣かなかつた。たゞ顔をまつかかにして、首をうなだれただけだつた。ところが弟の方は、自分がなぐられたのではないけれど、急に、わあつと泣き出してしまつた。

山番は、少年らが無断ではつたけ山を荒らしたことを、なあ、くど／＼とあこつた。そして、——またはいつてくると承知しねえぞ。

そういつて、ふたりをまつ林の外に追い立てた。そこまで来ると、じいさんは帽子の中のはつた
けを自分のざるの中にあけて、からになった入れ物を、少年の手にたきつけたなり行ってしまっ
た。

弟はなおしく／＼泣いていたが、こぼんで芝の上に落ちてゐる、兄の帽子を拾った。そして、それ
を見に手渡そうとした。すると、兄は帽子を受け取らずに、いきなり弟の横つらをなぐりつけた。
じいさんになぐられたので、その余憤が弟にとんで行ったのだらうか。いや、いや。こうした場合、
年下の者なんぞから親切にされると、なんか知らないが、兄にはいっそうたまらなかつたのである。
弟は不意になぐられたので、前よりも激しく泣き出した。と、その声につれて、今まで泣かずにい
た兄も、弟をなぐっておきながら、また、わあっと泣き出してしまった。

それから、ふたりは長いこと泣いていた。初めは、声を立てて泣いていたけれども、しまいには、
たゞ機械的に涙が出るだけだった。そして、あつたかい水たまがひっきりなしに流れているうちに、
ふたりのほつべたは、何か柔らかないものでなでられているような、なんともいえない快感を覚えてき
た。

その時、弟は小さい声で言った。

——にいさん、勘弁してね。
——うん。

兄はたゞ「うん」と言っただけだった。声はうるんでいるが、明かるいひびきを持っていた。

やがて兄はどろだらけになつている帽子を拾つて、ひざの上で五、六度たゝいた。彼はそれをかぶ

らないで、片手に持ったまゝ、別の手で弟の手を取った。そして、うちの方へ歩き出した。しかし、
ふたりはみち／＼思い出したように、なお、泣きじゃくっていた。 (山本有三全集)による)

【学習の手引】

- (1) この文の読後感を話しあう。
- (2) この文を読んで、特に書きぶりについて気がついたことがあったら、それを簡條書にしてみる。
- (3) 自分の周囲のことに取材して文章を書く。
- (4) できれば、山本有三の、外の小説を読んでみる。

五 牛 を 追 う

五 十 嵐 力

五十嵐力は、明治七年(一八七四)山形縣米沢市で生まれ、昭和二十二年(一九四七)になくなった。文学博
士。著書には「新文章講話」・「新國文学史」・「趣味の傳説」・「平安朝文学史」などがある。

老農日氏の話である。

日本の古言には、簡單なうちに、実に奥深い眞理を含んだのがあるものです。

いつぞや、——もう二十年にもなりましようか、——海上胤平うながみねひらという歌人が高崎正風たかきまさかぜという人の歌
を評した中に、高崎氏の歌に『牛をひくうんぬん。』とあつたのをとがめて、外國は知らずわが國で
は、昔から牛には『追う』と言ひ來つたものであるのに、『牛をひく』と言ふのは落ち着かないこと
ばづかいだ、と言つたのがありました。

海上胤平
歌人。(八三六
—五二六)

高崎正風
歌人。(八三六
—五二六)

板橋
東京板橋
区

当時私はそれを見て、歌人なんてひまつぶしにくだらんことを言つて楽しんでゐるものだと思つて、ばかにしておりましたが、その後十数年たつて、はつと思つたことがありましたよ。

それはこういうわけです。

ある日、牛を一匹板橋まで送つてやる用があつて、ひとりの男にあずけて出してやりましたが、ほどなく走つて来て、

「乞食橋の向こうまで行くと、牛がすわりこんで、どうしても動かなくなりました。」
と云うのです。

「いくじのないよわむしだ。それじゃおまえが行つてつだつてやれ。」

と云つて、小力のある他の男をつけてやりましたが、しばらくすると、それがまた歸つて来て、

「ふたりでも、どうしても立ちません。」

と申しました。

「ばかなやつだ、ふたりがかりで牛一匹動かせないやつがあるか。それじゃ五平、おまえ行つてやれ。」
と申しますと、五平は、

「情ないやつだな、それじゃおれがひとつ立たしてやろうか。」

などと言つて、威勢よく出かけて行きましたが、しばらくすると、それも歸つて来て、

「だんな、どうしても動きませんよ。きょうはどうかしたんですな。打つても、たゝいても、引つ張つても、だまして、ちよつとも動きませんや。」
と申しました。

穴戸邸
豊島区巢鴨
にあった。

私は「おかしなことだ。しかしおれが行けばどうにかなるだろう。」と、怪しみながら、動物に対する飼主の威光と、男どもには多少まさつた一日の長とを頼みにして、急いで行つて見ますと、なるほど、牛のやつが穴戸邸の裏門の前に、だいばんじゃくと腰をすえており、まわりにはまっ黒に人だかりがしています。それから私は三人の男にてつだわして、むちうったり、あやしったり、いろ／＼とくふうを試みましたが、どうしても動かしことができません。

困りぬいて、ぼうぜんとしておりますと、人だかりの中に、はんでんを着ても、ひきをはいた馬方らしい六十かっこのおじいさんがおりましたが、

「だんなそれじゃ動きますまいよ。私がひとつやってみましようか。」と云つてくれました。

「それはありがたい。ぜひに。」

と云つて、ねんごろに頼みますと、おじいさんは私の手から鼻綱を取つて、静かに牛の右側に立ちましたが、右の手に持った綱を伸ばして、牛のしりべたを軽く打ちながら、「しっしっ」と申しますと、だいばんじゃくの牛がたちまちひと身ぶるいして、むっくり起き上がりました。

それから、おじいさんは、後の方に立って、しりをぶちつゝ二、三度丸く引きまわしましたが、やがて三、四十間追つて行つて、

「さあ、こうして後から追つていらっしやい。もうだいじょうぶです。」と云つて、綱を渡してくれました。

私は厚く礼を述べて別れましたが、この時電光のように私の頭に浮かんできたのは、例の海上氏の言われた、牛には「追う」と言い來たつたものであるということでありました。私はいっこうに古学

に不案内ですが、古いやまとことばの中には、いくらもこういうふうな、祖先が幾百年の経験を結晶させて、三、四字の中に不動の眞理をたゞみ込んだのがあることでありましょう。ことばの味わいな
んていうものも、実にえらいもんですね。
私はこの老農夫の話をば、おもしろく、意味が深いと思い、備忘することにした。

〔八重葎〕による)

【学習の手引】

- (1) 「牛を追う」という言い方は、どうしてできたかを考えて、話しあう。
- (2) ことばというものはどのようにしてできてきたかということについて話しあう。
- (3) 次の問に答える。
- イ、「不動の眞理をたゞみ込む」とはどういうことか。
- ロ、「祖先が幾百年の経験を結晶させて」というのはどういう意味か。
- (4) 幾百年の経験を結晶させていることばを、もっとさがしてみる。

六ぶす

(狂言)

この課は狂言である。古いことばに注意しながら、学習しよう。

三人 大名 太郎冠者 次郎冠者

大名「このあたりの大名でござる。けふはさる方へ参る。太郎冠者を呼び出し、申し付けることがあ

る。太郎冠者あるか。

太郎冠者「はあ。

大名「ゐたか。

太郎「御前に。

大名「念なう早かつた。次郎冠者も呼べ。

太郎「かしまつてござる。次郎冠者召すわ。

次郎冠者「心得た。御前に。

大名「なんぢらを呼び出すは別のことではない。けふはさる方へ行く。兩人

ともに留守をせい。

冠者二人「かしまつてござる。

大名「それに待て。

二人「はあ。

大名「やい、このあなたに、ぶすがあるほどに、さう心得。

二人「それならば、兩人ともにおもいたしませう。

大名「さうではない。このあなたに、ぶすというて、毒がある。この方から吹く風に当たつてさへ滅

却するほどに、さう心得。

二人「かしまつてござる。

太郎「やい、次郎冠者、今日のやうなお留守はあるまいぞ。

さし絵
狂言「ぶ
す」。



ぶす
毒物のこ
と。ぶすと
もいう。

次郎「を、そなたがともに行けば、みどもが留守をする。みどもがともに行けばそなたが留守をする。けふのやうな言ひあはせた留守はあるまいぞ。そりやあ。

太郎「何事ぢや。

次郎「ぶすの方から、風が来た。こゝにてはなせ。

太郎「みどもは、あのぶすを見ようと思ふ。

次郎「やくたいたいもないことを。おけ。

太郎「あの方から吹く風が、当たらねば苦しうない。あふいでくれ。

次郎「心得た。

太郎「あふげ。あふげ。

次郎「心得た。ぬかるな。

太郎「ぬかることではない。さあ、紐は解いたぞ。さて、ふたをあげうほどに、あふげ。

次郎「心得た。

太郎「さて、ふたをあげたぞ。みどもはあのぶすを見て来う。

次郎「一段とよからう。

太郎「やい、見て来たわ。

次郎「いかやうのものぢや。

太郎「なんぢやは知らぬが、黒い物がどつみりとしてある。うまさうな物ぢやほどに、みどもは食うてみよう。
どつみり
どろくすと
すしたよろ

次郎「やくたいたいもないことを。おけ。

太郎「みどもは、ぶすに領じられたか、食ひたうてならぬ。行て食て来う。

次郎「みどもがをるからは、やることはならぬ。

太郎「なごりのそでをふりきりて、ぶすのそばへぞあゆみ行く。(太郎ぶすを食む) むし。

次郎「やい太郎冠者、なんとした。

太郎「砂糖ぢや。

次郎「なんぢや。砂糖ぢや。

太郎「なか、なか。

次郎「どれ、どれ。

太郎「まづ食うてみよ。

次郎「心得た。むし、まことに砂糖ぢや。

太郎「これを食はずまいと思つて、ぶすぢやの。毒ぢやのとおしやつた。

次郎「なんぢばかり食うてよいものか。

太郎「それならば、ちとやらう。

次郎「そのやうに取らずとも、ちつと取れ。

二人「さて、うまいことかな。

太郎「ほ、う、よいことめさつた。頼うだお方の、ぶすぢやの、毒ぢやのとおしやつたに、皆あくやつたと、頼うだお方のお帰りなされたならば申し上ぐる。

牧溪和尚
大陸南宋末
の画僧。蜀
の法常。蜀
名

次郎「みどもが、おけと言うたにあけた、某それがまつすぐに、申し上ぐる。

太郎「やい、これはじゃれごとぢや。この言ひわけは、あの掛け物を破ればよい。

次郎「心得た。さらりさらり。

太郎「よいことめさつた。あれは頼うだお方の、牧溪和尚の墨絵の観音で、御秘藏なされたものを、

あのやうにめさつた。お帰りなされたら、きつと申し上ぐる。

次郎「破れと言うたによつて、破つた。みどもが申し上ぐる。

太郎「やい、これもじゃれごとぢや。

次郎「さて、この言ひわけどもは、なんとするぞ。

太郎「この大天目を破れば、いひわけが立つ。

次郎「いかないかな。また迷惑をさせうて。

太郎「みどもも、手をかける。そちらを持って。

次郎「心得た。

太郎「ぐわらり。

次郎「ちん。

太郎「さて、お帰りなされたらば、泣いて居よ。

次郎「泣けばよいか。

大名「ただいまか罷り帰る。やい、もどつたぞ。

二人「泣け〜。

大名「心もとないが、何事ぢや。

太郎「次郎冠者申し上げ。

次郎「わごれ、申し上げさせ。

太郎「お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲すまをとりましてござれば、次郎冠者は手取りでござり、

私が小股またを取つてこかしますを、こけまいとぞんじて、掛け物に取り付いたれば、あのやうになり

ました。

大名「これはいかなこと。あれは、みどもが秘藏の観音を、あのやうにしをつた。

次郎「かへしさに、天目の上へ投げられました、あのやうに微塵みじんになりました。

大名「これはいかなこと。おのれをなんとしたものであらうぞ。

太郎「かやうに大事の御道具を損そとひまして、生けてはおかせられまいとぞんじて、ぶすを食べて死な

うとぞんじ、くだされたれども、まだ死にませぬ。

大名「おのれら、今のまに滅却せうぞ。

太郎「一口食へども、まだ死なず。

次郎「二口食へども、死なれませず。

太郎「三口、四口。

次郎「五口、六口。

二人「十口あまり、皆になるまで食うたれども、死なれぬ命、めでたさよ。なんぼう。

大名「やい、そこなやつ。

次郎「はあ。」

太郎「これはなんとしたものであらう。

大名「まだ、おのれはそれにをる。

二人「ゆるさつしやれゆるさつしやれ。

大名「やるまいぞやるまいぞ。」

〔「狂言記」による〕

【学習の手引】

- (1)この狂言のすじを短いことばで言ってみる。
- (2)この文の組み立てについて話しあう。
- (3)この文の文章について話しあう。
- (4)登場人物の性格について話しあう。
- (5)狂言についてもっと調べる。

七なぞの文字

栗田賢三

栗田賢三は、明治三十三年（一九〇〇）長崎縣で生まれた。哲学者。

一

ナポレオンのエジプト遠征の第二年初め、一七九九年のことであった。ナイル河口のロゼッタという

ナイル河
アフリカ最
大の河。ピ
クトリヤ湖
から発し、
地中海にそ
そぐ。

町の附近で、フランス軍の工兵がごんごうを掘っているうちに、妙な文字がいっぱいに刻み込まれて
いる一つの石を掘り出した。縦一・一四メートルばかりの玄武岩で、確かに昔の石碑に違いない。
普通の遠征軍であったら、おそらく妙な石だと思っただけで、そのまゝほり捨てるか、それとまちよ
うど都合がいいとばかりに陣地の工事に使ってしまったかもしれない。しかし、この軍隊に学者も同
行してエジプトの研究をしているということは、兵士たちも知っていた。また、何か珍しい物を見つ
けたら届け出ろという達しが、前もって出ていたのかもしれない。さいわいにこの石はほり捨てら
れずに学者の手にまわされた。

調べてみると、この石には三通りの文字がしるしてあった。いちばん上の段には、一つ／＼何かの
形を表わした略画のような文字がしるされ、中の段には、その絵文字をくずした形の文字がしるして
あった。この二つがエジプト文字であることは、外の記念碑や壁やその他のものに書いてある例から
みても、学者たちには一目でわかった。絵模様に似た方をかい書とすれば、くずした方はいわば草書
であって、学者は楷書に当たる方をヒエログリフイックとよび、草書の方をデモティックとよんで
いる。ところで、この石を調べた学者たちが急に目を輝かさずにはいられなかったことは、第三段め
にギリシア文字の文章が刻み込まれていたことである。

エジプトの二通りの文字と並んでギリシア文字が書いてある——たゞそれだけのことではあった
が、これを発見した学者たちは、こちどりして喜んだ。ごんごうのすみから掘り出された粗末な石碑
のかけらは、たちまち学者たちの注意をよんで、貴重な研究材料となってしまう。なぜだろう。外
でもない、学者たちは、こゝに、二千年近くも読む人のなかつたエジプト文字の秘密を解くかぎが見

つかったと考えたのである。

ギリシア文は、ヨーロッパの教育ある人ならだれでも読める。下の段にしるされてあるものを読んでみると、次のような意味であった。

西暦紀元前一九六年の三月、エジプトの神官たちはメンフィスに集まり、エジプト王プトレマイオス^{II}エピファネスの手柄と偉さをほめたえ、次のように決議した。

國內の神殿にはいづれもエジプトの救主プトレマイオスの名をしるした像をまつり、毎日禮拜させること。

王の金色の像をおさめた龕^{かみ}を造り、これを中心に行列を作つて、賛美歌をうたいながらおほぜいの人中をねり歩かせること。

王の誕生日や即位の日を祭日として、毎年これを祝うこと。

以上の決議を國中に告げ知らせるため、それをヒエログリフィック、デモティックおよびギリシア字の三通りに書いて石に刻み、方々の神殿の前に建てることにした。

これを見ても、この三通りの碑文が同じ意味を表わしたものであることは確かである。そうとすれば、既にヨーロッパ人には樂々と読めるギリシア文をたよりに、残りの二通りの文字をこれと比べあわせつゝ解いていったならば、きつとそれを読みこなすことができるに違いない。そしてこのエジプト文がいったん読み解かれたならば、一般にエジプト文字の読み方がわかり、外の石碑や壁などに書いてある文字も読めるようになるに違いない。学者たちは、こう考えて喜んだのである。

この石碑が造られた年代は、有名なアレクサンドル大王がペルシアを征服し、エジプトの支配権がペルシア人からギリシア人に移った時代で、エジプトにはギリシア人がおほい来ていた。それで碑文もギリシアとエジプトと二通りの文字で書かれたのであるが、偶然にこの年代の、しかも両方の文字が比べあわされるような碑文が見つかったということは、エジプトの研究に従事していた人々にとっては、実に得がたい幸運と思われたのであった。

二

「今や、祕密を開く時が来た。」——ロゼッタから掘り出された碑文を前にして、学者たちは喜び勇んで、そう考えた。もちろん、彼らはさっそく、下の段のギリシア文と比べあわせつゝ、上の段の文字を読み解くことにとりかゝつた。

ところが、やってみると彼らはびびくりした。そうやす／＼解けるなどではなかったのである。第一、この石碑はさん／＼に傷ついてしまっている。かんじんなヒエログリフィックの部分は半分欠け落ちてしまっているし、残りの半分さえ一行として完全なものがない。ヒエログリフィックのどの字が、ギリシア語のどの字に当たるのか、見当のつけようがなかった。むろん初めから、わけなくできることとは考えていなかったから、学者たちもいろ／＼と努力してみた。多くの学者が入れ代わり立ち代わり、なんとかしてヒエログリフィックを読み解こうと努めたけれど、ひとりとして成功する者はなかった。たゞわずかに、碑文の中にあるだ円形のわくに囲まれている文字が、どうやら王様の名まえらしいということだけ見当がついた。外の碑文や、いろ／＼な彫刻などを比べてみて研究した結果、たゞ、これだけのことが確からしいとわかったのである。その外には全く何も得るところがなか

った。

今度こそは千数百年來のなぞが解けると喜んだ学者たちの期待は、こうしてむなしくなってしまう。いったんはいき／＼とみんなの心にさし込んだ希望の光は、とう／＼はかなく消えてしまった。エジプト文字も、したがってまた古代エジプトのことも、あい変わらず神秘的なぞの中に包まれてしまったのである。ロゼッタ石は、外の遺物と同様に、たゞ不思議な遺物としてながめられるばかりで、などを解くかぎとなることがついにできなかつた。いつとはなしに、この文字を研究しようとする人も少なくなり、二十年の歳月が過ぎていった。そしてエジプト文字の秘密は、そのまゝ永遠の秘密となってしまうのかと思われた。

この時現われたのが、ジャンソフランソアリシャンポリオンである。彼は学者たちがあきらめた問題を再び取り上げ、もう一度それを解こうとして、勇敢にも立ち上がったのである。

三

ジャンソフランソアリシャンポリオンは、一七九〇年、南フランスのフイジャックという所に生まれた。一七九〇年といえば、ロゼッタ石が発見される九年前である。だからロゼッタ石が学界で問題となつた時には、ちょうど十歳だつたわけである。学者たちの大問題がわずか十歳の少年を奮発させるわけもないが、一世に名をとどろかした英雄ナポレオンのエジプト遠征の話や、それに伴って耳にはいるエジプトのさまざまの不思議は、少年の心にも大きな影響を與えたに違いない。ごく幼いころから、古い昔のことばや歴史の話が好きだつたシャンポリオンは、十二、三歳のころ、もう古代エジプトの研究に志を立てていたということである。

グルノーブル
南フランス
の都市。リ
ヨンの東南
にある。

こうして、既に少年のころから、彼は手に入る限りエジプト文字の写しなどを集め、なんとかその秘密を解こうと苦心していた。グルノーブルで学生生活をしている間も、後にパリに來てからも、絶えず古代エジプトの研究を続けてきた。別してその文字の研究には、人知れぬ苦心を積んできた。もちろん、そのころには、彼もとうにロゼッタ石の問題を知っていた。おそらくロゼッタ石のなぞがついに解けなかつたということが、かえって彼の研究心を刺激し、ますますエジプト文字の探究に深入りさせたのであろう。彼の研究は二十年も続いたのである。

しかし、あらゆる彼の苦心をあざ笑うように、エジプト文字は少しもその秘密を明かそうとはしなかつた。どんなに努力しても、どんな方法をとつても、しよせんこの秘密を明らかにすることはできないのか。さすがのシャンポリオンもいくどか失望に陥つて、長年の研究を捨てようと思つたことも一度や二度ではなかつた。だが、けつきよく、彼は子どもの時からの問題をほおり出さなかつた。何度も絶望に陥りかけながらも、あきらめずにその研究を続けていった。

その努力はむだではなかつた。とう／＼彼の苦心が実を結ぶ時が來た。一八二二年、彼が数え年三十三歳の正月、ついに最後のかぎが見つかつたのである。彼の喜びは、おそらく私たちの想像も及ばないほどであつたろう。いったん、この最後の手がかりがつかまると、今まで利用のできなかつたロゼッタ石がたちまちこの上もなく有力な道具となり、千余年の人類のなぞ、エジプト文字も、もつれた糸のほぐれるように、端から順々に解けてゆくこととなつたからである。

四

エジプトの遺跡には、ところどころに、やりの穂先のように先のとがった四角な石の柱が立ってい

る。これはオペリスクといつて、王や王妃のために建てた記念碑であるが、大きさはずいぶん大きく、中には高さ二十メートルに達するものもある。記念碑のことであるから、むろんその表面にはエジプト文字が刻んである。シャンポリオンが、エジプト文字の秘密を解く最後のかぎとして使ったものは、あるオペリスクに刻まれたヒエログリフイックの写しであった。

そのオペリスクは、これもロゼッタの碑と同じく、ギリシア人がエジプトを支配していた時代にてきたもので、その根もとの所にやはりギリシア文字が彫つてあつた。それによつて、このオペリスクはブトレマイオス王とそのさきさきクレオパトラとの記念のために建てられたものだといふことがわかつた。エジプト文字の部分はあい変わらず読めなかつたが、しかし、その中にだ円形のわくが二つあつた。シャンポリオンはこれに目をつけたのである。

エジプト人が王や王妃の名をしるす時、ちょうど、陸上競技のトラックのような形のだ円形のわくで囲む習慣があるといふことは、今までの研究、ことにロゼッタ石の研究のおかげで、確かめられている。してみれば、このオペリスクの碑文の中にある二つのわくに囲まれた文字は、ブトレマイオスとクレオパトラという名まえを表わしているに相違ない。シャンポリオンはそう考へついて胸をおどらせた。

「そうだ。この二つのわくに囲まれた文字を、ブトレマイオスとクレオパトラといふギリシア文字と比較してみればよい。」

彼は、今まで黒い雲がたち込めていた自分の行く手に急に明かるい日光がさし入つて來た思いで、この比較にとりかゝつていった。その結果は実にすばらしいものだった。彼の見当は正しく的に当た

ブトレマイ
オス
エジプト
王。生歿年
不詳。在位
紀元前五
世紀
ラ(紀元前
三)

つたのである。二十年ばかり前に、お、ぜいの学者たちがロゼッタ石に期待して、しかも失敗に終つたことが、今度はみごとに成功したのである。少数ではあつたけれど、ヒエログリフイックのどの文字が、ギリシア文字のどれに当たるか、それが初めてわかつてきた。

こゝでは諸君にわかりやすくするために、ギリシア文字の代わりに、ヨーロッパのイロハ、すなわちABC(アルファベット)を用いて、シャンポリオンのこのすばらしい成功を説明してみよう。

第一に解かなければならないなどは、二つのだ円形のわくの、どつちがブトレマイオスで、どつちがクレオパトラか、という問題である。

まずブトレマイオスとクレオパトラといふことをABCで表わしてみると、次のようになる。

PTOLEMAIOS (ブトレマイオス)

KLEOPATRA (クレオパトラ)

この両方のどつちにも用いられている文字のあることは、諸君にもすぐわかるに違いない。第一にPという文字が、ブトレマイオスの最初と、クレオパトラの第五番めに用いられている。次にTがブトレマイオスの方では二番めに、クレオパトラの方では七番めにある。それからOはどうかというとな、ブトレマイオスの三番めと九番めにあり、クレオパトラでは四番めにある。またLは前者ブトレマイオスの四番め、後者クレオパトラの二番めにある。Eは前者の五番めと後者の三番めにある。最後にAが、前者の七番めと後者の六番めおよび九番めにある。これをまとめて表に表わしてみると、次の第一表のようになる。(この表で一、二、三など日本数字で表わしてあるのは、ブトレマイオスの中に

ある文字の順序で、1、2、3などアラビア数字で書いてあるのはクレオボトラの方の順序である。これだけまず用意しておいて、そこでだ円形のわくの中の文字を調べてみる。二つのわくの中の文字のうちに、両方に共通なものがあるが、しかも、その順序がABCで書いたプトレマイオスとクレ

A	E	L	O	T	P
七	五	四	三	二	一
九					
6	3	2	4	7	5
9					

第一表

六	四	三	二	一	
六	七				
6	3	2	4	10	5
9					

第二表

オボトラの場合と同じ順序になっていたら、どっちのわくの文字がプトレマイオスで、どっちのわくの文字がクレオボトラか見当がつくわけである。同時にエジプト文字のどれが、ABCのどれに当たるかも見当がつくわけである。

の名まえを写したものである。これを見比べてみると、A図の第一番めと、B図の五番めとに□のしるしがあることはすぐわかる。これと前の第一表とを比べてみよう。一と五という数字のついているのはPという字である。してみると□はPという字に当たるらしい。したがって、Pがいちばん最初にあるのはプトレマイオスの方だから、A図がプトレマイオスと判断してもよさそうである。しかし、そう決める前に、外の字も調べておかなければならない。

A図とB図とを比較して、前と同じように共通な字を拾い出し、A図の方では何番めか、B図の方では何番めか、一つ一つ調べてみたまえ。その結果を表にすると第二表のようになるであろう。(前と



A 図



B 図

同様、一、二、三の日本数字はA図の方の順序、1、2、3のアラビア数字はB図の方の順序である。

そこで第一表と第二表とを比べてみると、もちろん、ぴったりとは一致しないけれど、四字だけはだいたい一致している。その一致している字を、第一表と第二表とから取り出して並べてみると、第三表のようになる。この第三表をよく見てみたまえ。□がPであり、○がOであり、△がLであり、鳥がAであることは、どんな人にならなくても見当が

P	一	五
O	三	九
L	四	二
A	七	六
九		
六		
九		

第三表

つくではないか。A図がプトレマイオスで、B図がクレオボトラであることはもうまちがいない。

しかし、まだ考えなければならぬことが残っている。第一表と第二表と一致していない点は、どう解釈したらいいのだろうか。いやそればかりではない。そも／＼おかしいのは、PTOLEMAIOS (プトレマイオス) は十字なのに、A図は八字しかない。またKLEOPATRA (クレオボトラ) は九字なのに、B図は十一字もある。これはいったいどういうわけなのだろう。そこで、B図をもう一度よく検査してみると、Aに当たる鳥の絵文字がちょうど九番めと

あつて、KLEOPATRA（クレオパトラ）の中にあるAの位置とびつたりと合っている。これで見ると、B図は十一字あるけれども、終りの二字は発音とは関係のない何か符号なのだろう。シャンポリオンはそう考えて、クレオパトラというのは女の名まえであるから、これはたぶん女の名まえだということを知らせるための符号だろうと推測した。そうとすれば、B図の1から9までの文字は、

KLEOPATRA

A B C で書いたクレオパトラの九字と一つ／＼合うわけである。つまり上のようになる。

そこで、第三表でわかった文字の外に、また新しく四

つの文字がわかった。

K E T R

だが、Tという字はPTOLEMAIOSの二番めにもある。それなのにA図の二番目は△ではなくて、まるで違った△の字である。これはどうしたことだろ

う。シャンポリオンは、そこまで疑ってみた上、たぶん同じ音を表わす二通りの文字があるのだろうと考えた。ちょうど日本語でいえば、イロハのイとキ、オとワのようなものである。

これでクレオパトラの方はかたづいたが、次にブトレマイオスの問題である。ブトレマイオスはA B C で書くと、PTOLEMAIOSとなり、十字になるのに、A図は八字しかないではないか。

それで、A図をもう一度よく調べてみなければならぬ。今までわかったところから逆に推してゆくと、ブトレマイオスというエジプト語では、文字が次ページのように並ぶはずである。

ところが、A図では五番めのEに当たるQがなくて、まるで違った絵がある。その代わりに六番めと七番めにQが二つ並んでいる。また終りから二番めにOに当たるPがない。これはどう説明したら

P T O L E M A I O S

いいのだろう。せつかく今まで得た知識も、当てにならないのであろうか。

シャンポリオンは、この疑問に出会って考えているうちに、EもOも二つとも母音（アイウエオの五つの音）であつて、子音（A B C の中のBとかFとかTとかなどのように母音と結びついてはじめて一つのまとまった音となるものを子音という。B A と書けばバ、T A と書けばタとなる。）ではないということに気がついた。そしてエジプト人は母音を正確に書き表わさないのかもしれないと想像してみた。そう考えてみると、A図の五番めはM、いちばん終りはSになるわけである。そこでA図をA B C に書き直してみると次のようになる。

PTOLMEES

これをそのまま読むと、ブトレメースである。しめた。ギリシア語のA I という音は、E E と割合に近いよく似た音である。だからA I I E E I I とみることができるではないか。そうすれば、A図の八字がPTOLEMAIOSを表わしていると考えてまちがいはない。A図の五番めがM、最後がSであることもまちがいない。——オペリスクのなどはついに解けたのである。

こうして、シャンポリオンがまず手がかりに選んだ王と王妃の名まえはすっかりわかった。二つのわくの中の文字はみんな読み解かれてしまった。十二のエジプト文字の発音がわかり、二つのエジプト文字の意味に見当がついた。——ここまでなぞを解いてきた時のシャンポリオンの気持はどんなであつたらう。頭脳をしぼりつくすような二十年間の苦心が、今や初めて報いられてきたのである。も

ちろん、わかったのはわずか十何字かの文字の発音にすぎないけれど、とにかく、何度も何度も彼を
はね返して動こうともしなかったとびら、一寸、二寸と開きはじめてたのではないか。彼はおそらく
全身がぼろぼろとなるような喜びを覚えたに相違ない。同時に、なお、彼の研究の行く手に残っている
多くのなぞを思つて、そのなぞにぶつかつてゆく新しい勇氣がみなぎってくるのを覚えたに違いな
らう。

五

十何字かのエジプト文字はわかった。しかし、もとより、これだけの結果で満足してしまふシャ
ンポリオンではなかつた。彼は、この苦心の結果をもとにして、敗走しはじめた敵を追撃するよう
に勝ちに乗つて研究を進めていった。

彼は続いて、外の碑文の中にある幾つかの王の名まえを読むことに成功した。読める字の数も順々
に増していった。最初の発見の時には、たゞ想像や推測にすぎなかつたことも、多くの材料を集めて
研究してゆくうちに、びつたりと実際に合つていくことがわかつてきた。女の名まえを表す符号と
か、同じ音を表わす違つた字とか、エジプト人が母音を正確に書き表わさないということなどは、最
初の十何字かを解いた時には、想像で仮にそう決めたことであつたけれど、後になつて、全くその通
りだということが、りっぱに証明された。

こゝまで研究が進んでくると、再び引き合ひに出されたのがロゼッタ石である。二十余年も学者た
ちが持てあましていた碑文は、こゝにいたつて、初めて研究に役立つこととなつた。ロゼッタ石の秘
密を解くかぎが見つかつてみると、今度はロゼッタ石がエジプト語の秘密を解きたいせつなかぎとな

つて働き出したのである。シャンポリオンの研究は、この碑のおかげでたいへんはかどつた。そして、
この手がかりを発見した一八二二年の暮れには、フランスの学士院でその研究の結果を、堂々と発表
することができるようになつた。

むろん、彼の研究は学界を驚かした。

第一に、それまで人々は、エジプト語の絵文字はすべて何か決まつた意味を表わすものと考えてい
た。その考えは、シャンポリオンの発見によつて、全く打ち破られてしまつたのである。私たちが見
てきた通り、彼の発見したエジプト文字は、意味を表わす文字ではなくて、たゞ発音を表わす文字で
あつた。

文字というものにはいろいろあつて、たゞ音を表わすだけのものもあれば、また一字ごとに一つの
決まつた意味を表わすものもある。たとえば、イロハのイの字やハの字は、それだけではなんの意味
もなく、たゞイという発音、ハという発音を表わすだけであるが、山とか川とかいう字は、山なり川
なり、それ／＼あるものを意味している。象という字をとつて考えてみると、これは例の鼻の長い、
大きなからだの動物をさしている。これをゾウと書くこともできるが、この場合には、ゾの字もウの
字も、たゞそういう音を表わしているだけで、切り離してはなんのことかわからない。そういうわけ
で、発音を表わす文字と決まつた意味を表わす文字とは、まるで性質の違つたものなのである。日本
語のイロハや英語のABCは、音を表わす種類の文字である。漢字はいうまでもなく意味を表わす種
類の文字である。——シャンポリオンがエジプトのイロハを発見するまでは、学者たちは、エジプト
に音を表わす文字のあることに氣づかなかつた。エジプトの絵文字は漢字のようにみんなそれ／＼の

意味を持つているものだと考えていた。だから、シャンポリオンの発見は、学界の今までの考えを根本からひっくり返してしまったのである。

もつとも、音を表わす文字ばかりが使われていたわけではなかった。一つの文字で一つの決まった意味を表わすような文字も使われていた。そういう字は、たいがい、その文字の表わす物の簡単な絵からでき上がっている。たとえば、古いエジプト語では、太陽を表わす文字は☉であった。これは中華民国の日という文字の由来と同じである。

また、絵では表わしにくいことばを表わすためには、それと同じ発音の他の文字を借りることもあった。諸君はどこかで「酒あり☐」という看板を見たことがあるかもしれない。この場合☐は、酒をはかるますとは全く違った「ます」ということばの音を表わすために使われているのである。エジプト人は、ちょうど、この例とよく似た、まるで判じ絵のようなことも相当やったのである。

しかし、いずれにしても、シャンポリオンの研究のおかげで、全く手のつけようもなかったエジプト文字が、次第次第に正体を現わしてきた。学士院で研究の結果を発表したのちにも、彼は各国の博物館をまわったり、エジプトへ旅行したりして、熱心な研究の手を少しもゆるめず、一步一步エジプト語の残されたなどを解いていった。そして十年ばかりののちには、相当長いエジプト語の文章さえ翻訳できるようになった。——こうなると、今までたゞ珍しがられるばかりで、むなしく保存されていたパピルスの巻物がようやく役に立ちはじめた。たゞ驚きの目でながめられていた遺跡も、もとなんであったか、次第にはつきりと知られ出した。古代エジプトの真相が、霧の晴れてゆくように、見る見る明かしくなってきた。

エジプト学は、こゝに長足の進歩をとげることになった。

六

今日私たちは、文明の起源を知ろうとすると、エジプトの古代の文化を問題にせずにはいられない。しかし、エジプトについて何か知りたいと思えば、エジプト学者が調べておいてくれたことを学べばよい。何もエジプトの文字や遺物を自分で調べないでも、じゅうぶん信用もできる本がたくさん著わされているから、それを見ればまにあうようになっていく。だが、エジプトについての研究がこゝまされていくから、それを見ればまにあうようになっていく。だが、エジプトについての研究がこゝまされていくから、それを述べたような、長い歴史があったのである。これほどの苦心が土台となつて、今日の研究ができ上がっているのである。諸君が学ぶ西洋歴史の教科書で二、三ページにまめてある簡単な記事のかけにも、これほど大きな努力がひそんでいるのかと思うと、諸君はどんな氣持がすることだろう。

「なぞの文字」の話はこれで終りであるが、シャンポリオンがその後どうなったか、諸君はさだめし知りたいに違いない。——簡単にいうと、彼は勇敢な戦士が戦場で戦いつゝ倒れるように、不断の研究を続けつゝ、その途中で倒れた。日夜をおかぬ激しい研究のために健康を損じて、最初の研究の年からちょうど十年めの一八三二年に、やつと四十そこ〱の年で、死んでしまった。彼の兄は、彼の書き残しておいた書類を整理して、エジプト語の文法と字引とを出版した。この兄は、古代歴史を専門とする相当有名な学者であったが、弟の研究に刺激されてエジプト学をきわめるようになり、りっぱな研究を発表して弟のし残した仕事を継いでやった。

今日人類が持っているエジプトの知識は、もとをさかのぼるとシャンポリオンのおかげをこうむら

ないものはないといわれている。

(石原純編「世界のなぞ」による)

【学習の手引】

- (1) この長文のすじを短いことはで言ってみる。
- (2) ロゼッタ石は、どのようにして出現したのかということを考えて話しあう。
- (3) ロゼッタ石が、学者たちの注意をひいたわけについて話しあう。
- (4) シャンポリオンが、なぜの文字を解いていった順序を、簡條書にしてみる。
- (5) 表音文字と表意文字との相違について調べる。

八 シナリオについて

石 森 延 男

この課では、シナリオについて学習しよう。シナリオについて勉強することは、國語の力をつけるのにたいへん役立つものである。書き方を学習するだけでなく、いろ／＼くふうして、シナリオを書いてみよう。やさしいようだが、実際はなか／＼そうではない。力いっぱいやってみよう。

石森延男は、明治三十年(一八九七)北海道札幌で生まれた。文学者。童話や小説に筆をとっている。著書には、「咲きたす少年群」・「うさぎさん」・「火山島」などたくさんある。

あなたがたは、映画を見たことがあるでしょう。

何を見たか思い出すことができますか。まんがの映画もあったでしょう。文化映画もあったでしょう。

う。物語の映画もあったでしょう。

どれも、どれも、みなおもしろくて、美しいものであったに違いありません。

そのみなさんの大好きな映画が、あのようにはでき上がるまでには、いろ／＼な手順を通っていかなくてはなりません。なか／＼、容易なことではありません。

けれども、あの映画の撮影されるまでには、だいたい四つの手順を通ってきます。

そのいちばん初めは、さ／＼あらましのことを書いたシノブシスであります。

その次には、それを少し詳しく書いた筋書で、ストーリーといわれています。

こんどは、それを更に映画にするように、場面場面をはっきりと書いていったものが、シナリオになります。

おしまいに、それを仕上げして、撮影にかゝるといことになるのです。

いま、ここで取り上げたシナリオというものは、こんな位置にあるのですが、これからあなたがたは、このシナリオというものについて、いろ／＼と考えたり、調べたりしていくことになりましょう。

というのは、シナリオをよく読むと、映画の場面がはつきりと頭に浮かんでくるのであって、ぼんやりとしたいかげんな読みぶりはしなくなるからであります。もちろん、シナリオそのものがはつきりと、目に見えるように書かれてはありますが、読む人の心に、自由な想像ができるだけのゆとりは、じゅうぶんにあるわけです。

このように、シナリオを読み慣れていくと、書かれてあることを明らかにする力が、しぜんとそなわるばかりではなく、シナリオふうの文を書くことができるようになっていきます。

シナリオふうに見えるとは、どんなことでしょう。それは一口に言うと、自分の思っていること、あるいは、人に言いたいこと、知ってほしいことが、一場面ごとに、はっきりと示すことができるのであります。ぼんやりしたことばでは、もうまにあわなくなるのであります。

こんなことから、シナリオについて勉強することが、國語の力をつけるのに、たいへん役に立つものであるのに、氣がつくことでしよう。

これからは、映画はますますひろまるし、盛んになっていくに違いありません。またあなたがたも、それを見る機会が多くなるでしょう。そうなれば、いっそう、映画のふるさとともいうべきシナリオについて、よく知っておくことは、たいせつになります。

さて、シナリオとはいったいどんなものか、ちょっとこゝで話してみましよう。何か一つ例をあげてみましょう。

ある文の初めに、

——校門を出ていくと、佐藤君が歩いてきた。ぼくは、追い駆けていって、

「きみ／＼、佐藤君。」

と、呼び止めた。

佐藤君は、

「なんだい。」

と、いつもの笑い顔をして、ぼくを見返した——

と書いてありました。これをシナリオふうに書き変えてみますと、

F・I (暗いところから、ぼつと現われてくる)

校門のとびらが開かれています。午後の日ざしが、校門をな／＼めにさしている。

そこを学校がひけて帰っていく子どもたち。

ちよつと子どもがとぎれる。遠くでオルガンの音がする。

佐藤君が、ひとりで、校門を出ていく。

走って来る足音がして、ぼく(主人公)が校門を出ていく。

駆けながら、

「きみ／＼、佐藤君。」

と呼ぶ。

佐藤君のふり向く顔、にこ／＼した明かるい顔。

「なんだい。」

「——」

まずこんなふうに書いていくことができます。

これは、私がシナリオふうに書き直したのですが、あなたがたが書くと、これとはまた違ったものになるに違いありません。そこにおもしろさがあります。十人が十人とも、違った心の絵を描くところに、シナリオのおもしろさがあるわけです。

たとえば、こゝに、

「夕風に、白ばらの花、みな動く」

という俳句があります。これは、正岡子規の名高い句であります。

仮にこれを、あなたがたが、めい／＼映画の一場面としてとってみるとしたらどうでしょう。

ある人は、白ばらが、アーチ型をした庭に咲いているところをうつすかもしれません。

またある人は、そうではなくて、はちうえに咲いている白ばらの群れをうつすかもしれません。

またある人は、野原に咲いているばらをとるかもしれません。

「みな動く」ということばだけでも、ある人は微風に動くところをねらうかもしれません。

ある人は、かなり強い風に、ゆさ／＼とゆれるところを考えているかもしれません。

あるいは、かすかに動く静かな情景かもしれません。

ゆうべといつても、暮れに近いゆうべなのか、また、午後の日の多いゆうべなのか、みな人々によ

って違った心の絵を描くことでしょう。

シナリオは、めい／＼の違った心の絵をめいりょうに表わすのでありますから、実に個性的なもの
ということが出来ます。

もう一つ例をあげると、たとえば、「貧しい一けんの家」ということばがあったとして、これをシナ
リオに書く場合を考えてみましょう。

この映画を見て、なるほどこれは貧しい家だ、ということがわからなくてはなりません。そのため
に、「貧しい家」というもののようすを、くふうしていくわけになります。

障子がぼろ／＼に破れているとか、雨もりがして、それをかなだらいで受けているとか、その外、

考えればいろ／＼なことが拾い出せるのであります。それによって、貧しさの程度もわかってくる。
その家に住んでいる人たちの氣持も察せられることになってきます。

この反対に、「富んでいる家」ということばについても、またさまざま／＼なことが考えられます。

このように、一つの形容詞についても、シナリオでは、その人らしい考え方や、感じ方が、よく表
われるのであって、ここに、個性的なおもしろい表現の世界がひらけてきます。

それで、シナリオは場面場面を非常にたいせつに扱いますので、場面が変わるごとに番号をつけて
いきます。

たとえば、

「そこへ一台の電車が来た。ドアがあくと、待っていた人が、わっと押し寄せる。降りる人が二、三
人、段を降りるのを見かけたが、乗り込む人の力で、押され押されて、中の方につめられてしまっ
た。」

こんどは乗る人どうしが、押したり押されたりして大騒ぎである――

三台めの電車がすいていて、騒がずに乗れた。冬が去っていくようななま暖かい風が、車窓から吹
き込んで来た。

その風にあおられていると、ふと、にいさんのえくぼが目の前を通った。」

を、次のように書くことができましょう。

1. 遠くから来る電車がだん／＼近づいて、正面で止まる。

2. ドアが開く。降りてくる男の人、女の人、段に足をかけると、乗る人の波で、降りかねる。

3. 「降りるんだよ、降りるんだよ。」
その声とはなんのか、わりもなく、乗る人の力で降りる人たちがもどされる。
4. 乗る人どうしのきばった顔、顔、顔。入りみだれる足、足、足。
5. チン／＼チン——あふれそうなドアのま、電車動き出す。
すじなりの電車、遠ざかっていく。
6. 二台めの電車、こんどは、降りる人は三人とも、無事に降りられる。
乗る人もみな乗り、ドアがしまる。すぐ発車。
7. 三台めの電車、降りる人ふたり、乗る人も少なく、その中に「ぼく」がまじっている。
8. 車窓からの風景、「ぼく」のとなり立っている女の人のスカーフが、風にあおられる。「ぼく」が、氣持よく目をとじる。そこに、「にいさんの笑い顔」が重なってうつる。

(二重うつし)

このように、順番をつけ／＼だん／＼場面を書きます。

どうか、あなたがたの持っている個性という宝石をみがき上げてください。そのみがく一つのやりとりとして、シナリオを読みこなす力と、それを使って心の絵を書き表わす力とを育ててください。

(「火山島」による)

【学習の手引】

- (1) 映画ができるまでの四つの手順を書いてみる。
- (2) シナリオふうに書くということは、どんなことを読みとって、話しあう。
- (3) シナリオについて勉強することが、どうして國語の力をつけることになるかを考えて、話しあう。
- (4) 第四課の「兄弟」をシナリオに書き直してみる。
- (5) できたら、いろ／＼なシナリオを読んでみる。

Approved by Ministry of Education

(Date Oct. 13, 1950)

教育文化研究会

会長 國立国会図書館館長 金森徳次郎

主幹 東京教育大学教授 石山脩平

國語科編集委員

東京教育大学附属中学校教諭 長谷川敏正

東京都立白鷺高等学校教諭 渡辺茂

成蹊大学教授 飛田隆

山梨大学教授 鳥山榛名

東京教育大学附属高等学校教諭 和田邦五郎

同 宮崎健三

お茶の水女子大学附属高等学校教諭 稲村テイ

東京都目黒区立第八中学校教諭 大村浜

一、出版権設定登録済
二、意匠登録出願中
三、無断轉載を禁ず

昭和二十四年八月十三日 発行
昭和二十六年六月一日 三版印刷
昭和二十六年六月五日 三版発行



「國語」中学二年(二)
定価金二十四円五十銭

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育文化研究会

著者 代表者 金森徳次郎

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地
教育図書株式会社

発行者 代表者 小松謙助

東京都新宿区市谷加賀町一ノ二番地
大日本印刷株式会社

印刷者 代表者 佐久間長吉郎

東京都新宿区市谷砂土原町一ノ二番地

発行所 教育図書株式会社

広島大学図書

0130449692

